

生田花世さんへ私信がわり

生田花世さん。

その後のお模様、かげながらうかがっています。おからだにお障りもないことをうれしく思います。

昨日は雑誌『新女性』をお送り下さってありがとうございます。その中の「女人文芸思想界近状」と題するお文章は少しどうかと思いましたが、あなたのおつもりでは、あれで当方のことを、好意的に御紹介下さったことになりました。うけれど、それはお考え違いなものでした。

それを申し上げる前に、ぜひ一つあなたにお聞きして頂きたいことがあります。私はあなたとお親しくしてみても、非常にあなたに愛をもちます。愛——この言葉、わるかつたら御免ください。とにかくあなたは殆んど最後までたった一人でいらつしやる。驚くべき頑固な孤独、わたしはそれを見ます。然し、御存じの通り、わたしはそれらのこと

七外

に就て、あなたに何もいわないできました。なぜなら私はあなたを非常に愛したからです。人がもつとも深い愛をもつとき彼は沈黙するでしょう。それとまた、たとえわたしが何か言つたとしても、あなたは全々、かたくなでいらつしやる。かたくななあなた、あなたのその孤独は、きつと春月さんにすら、溶けきることが出来なかつたでしょう。

あなたは人を信じられない。だからあなたは必然に「失うことなくして得る」ということをのみ、生活の方法となさつていられる。そこにあなたのダニのような陰気な、それと共に執拗さがある。

あなたをわるくいうものは「オベツカヤ」さんだというし、よくいうものは親切な「おばさん」だという。だが、そのどちらの批評も、あなたの心を底から満たすものではない。あなたは、オベツカヤさんでもなければ、親切なおばさんでもない。貪婪なエゴイスト、それがあなただ。そして私はそうしたあなたに切に心惹かれる。

あなたの対人生活、それは功利主義的だ。またそれはあなた自身に対してもそうだ。あなたは「甘やかされ」た、偷安的な空気、それを自ら作り出してでも、そこに安住したいと望まれる。そこであなたは人の悪口を嫌われる。意識してか、しないでかは分かんぬが、あなたは「人の悪口を封じるため」のあらゆる手段をおもちだ。

しかし、私はあなたに今申し上げたい。そうした「我執」のすべてを今こそ捨てられたいと。あなた自身を赤裸々に投げ出し、あらゆる批評、あらゆる迫害に、お身を曝された

生田花世さん。

あなたを守つたものはあなたの「我執」であつた。その「我執」のもつ手段であつた。それと同時に、あなたを陥れたものもそれであつた。それある限り、あなたは矛盾的な生きかたをされ、同時に「知識」に対する明確な洞察を欠かれるのだ。

あなたは一つの感想を書かれる時にも、功利主義的であられる。例えばアナにもブルにも、いように書かれる。しかし、このことはあるいは意識しないで、自然にこうなつてくることも知れない。つまりあなたの功利主義は、潜在的のものにまでなつてしまつてゐる。その結果、それがあなたの「知識」の活動をさまたげる。

もちろん、わたしはある一つの思想に固執することのみを、知識の活動とはいわない。むしろ、その反対をさすことが多い。つまり常に批判の目をもつというところ。そして人が深い批判の目をもつならば、ある場合には批判をもたない状態と同じ結果になる。つまり「愛」がそこに芽生えます。しかし、それと似て非な妥協的、八方美人的の態度、あなたのはこれだ。あなたは「愛」の持主でもなければ、「親切」の持主でもなく、「正直」でもない。だからあなたの批評は自覚したものに対しては失敗なんだ。

生田花世さん。

あなたはいわれる。「婦人戦線」(高群氏の)と「女人芸術」(神近氏のもの)になりきつたと見なす人の多い)とが、それぞれその婦人闘士を養成しつ、女人文芸思想界の前

入内

途は、よほどにぎやかになるであろう。あなたとしてはこれは好意的な批判でしょう。しかし、『女人芸術』は神近君のものであるか知らぬが、『婦人戦線』を高群のものといふことは断然おことわりしたい。われわれにとつて、かかる言葉ほど迷惑なものはない。なぜなら、われわれにとつては、誰が「中心」とか、誰が指導者とか、誰の「もの」などということは、いかにしても成り立たないことであるから。

生田花世さん。

さてまたあなたはいわれる。「赤かなりや、黒かなりや、わかき婦人文士は、いずれもその去就ただならぬありさまである」と。婦人文士——わたしはここで言いたい。こうした言葉の意味する専門的、分業的の意識で、われわれのところに行く人は初めからお断りしたい。つまり「プロレタリア文芸家」というような、「プロレタリア詩人」というような特殊階級を描き、その列に加わりたくてはいつてくるような人はわれわれはお断りする。われわれは極めて自由に「感情は文芸に」「意見は評論に」というような形の発表機関(即ち全被圧迫婦人のあらゆる感情的思想的叫びを糾合する機関)として、われわれの雑誌をもつたに過ぎない。「去就ただならぬ婦人文士」は、まずこのことを了解して、その去就をきめてほしい。「文壇的には永遠に仲人である」ということを覚悟の上ではいつてきてほしい。ではわれわれの求めるものは何か。「真」の生活である。われわれはあらゆる外的の惨めさをも、いかなる謬言をもかい潜ぐつて、ひたすらわれわれ自身の道に生きるのみである。

生田花世さん。

しかるにあなたはそれら「去就に迷う」婦人達に対して、あなた自身の感想を述べていられる。

あなたはいう。「アナーキストの人は、高群氏といい、平塚氏といい、望月氏といい、どちらかといえば、実行家ではなく、理論家という肌合の人だ。マルキストの人は、神近氏、平林氏、中本氏等、実行家という肌合の人だ。その如くアナーキズムは理論としてはすぐれているとするも、実行はマルキシズムにまたねげならぬ。だから……」

この文章は可哀そうなほど矛盾している。まずあなたのいわれる実行家肌なるもの分析——高群、平塚、望月に対する、神近、平林、中本、これによつて見るに、実行家肌なるものは、つまるところ「社交家的実行」「座談会的実行」をいうものらしい。なぜならば神近、平林、中本の諸君の「実行」はそれを証明するものであり、それに反して平塚、望月、わたし等、いかにもそうした実行には不得手なのである。平塚さんは、御存知の通り種々の実行（わが国婦人史上特記すべき思想的社会的）をしてきた。いま彼女は消費組合の仕事に熱中している。だが、こうした彼女が、生田さんの目に、実行家肌として映らないわけは、彼女は望月、わたし等と同じく社交的、座談会的に、ごく不得手であるからだ。そこで彼女は、望月、わたし等と同じく、そんな席には殆んど顔を出さない。かくて女流文芸社交会における、われわれの存在は、確かに「非実行」的であるのだ。ことに私などは、一回も顔を出さぬのだから、言語同断の「非実行」家だ。それに反して、なるは

ど神近、平林、中本の諸君はまさしく「実行」家である。

生田花世さん。

だがわれわれの「実行」に関する考えは、少くとも非常に違っている。われわれは——例えばわたしのことでいえば、わたしという者は、御存知の通りの無口——無口というよりも「語る」ことの下手な女で、わたしの友人達は、もはやわたしをこの点ではあきらめていきます。しかし、そのことが直ちに「非実行」的、「非社交」的であろうか。わたしは否と答える。なぜなら、わたしは「語る」ことでなく「聞く」ことなら、心からの喜びをもつてそれに対する。わたしは客をよるこぶ。しかもその客がわたしにしゃべることを要求する時にはわたしは喜ばない。なぜならそれは困るからである。しかし、その反対の場合ならば、わたしは実に「実行」的であり、「社交」的であることを自ら知っているのだ。そこでわたしは、結局かかることは、不得手も得手もなく、またいずれが実行的、社交的ともいえないではないかと思つていきます。

次に、こうした社交的、座談会的の実行ではなく、もつと広い意味の実行についても、われわれの考えはかなり違つている。

われわれは「沈黙」も実行、「理論」も実行、「運動」（狭義の）も実行で、実行という価値において、何等そこに区別はないと思つている。平塚さんがかなり長い間、何も書かれず、いわゆる社会的活動もせずいられたことがある。すると殆んどすべての人が、「平塚さんもうおしまいだ。元来彼女は実行の人ではない」といつた。つまり彼等のい

う「実行家」なるものは「実行屋」であることを意味する。それと同じことを私自身の例でいえば、かつて人々は私を「詩人」であるとし「女流詩人録」とか「文士録」とかに加えていた。いま彼等は「彼女は詩人ではない」とし、「女流詩人録」からも「文士録」からも抜いてしまった。福田正夫君などは「ついに彼女は詩人ではなかった」とか言ったりした。だが彼等が私を勝手に「詩人」であるとし、「詩人」でないとするのは、私自身にとつては無関係なことなのだ。

われわれの「実行」は、「必然」にのみ基づく。平塚さんが沈黙していたのは、彼女がそれによつて実行していたことであり、わたしが詩を書かないのは書いていることと同じ。その意味で、もしわれわれがすぐれた理論家ならば、(なるほど神近君、平林君、中本君等に比べたら、われわれはかなりすぐれているらしい)それは同時に、すぐれた実行家であるということの意味はしないか。

われわれはいずれにしても「屋」であることはできない。だからある場合われわれは石の如くも沈黙するが、また敢然と動き出す等のこともある。だから、われわれにとつて実行非実行は、実行家肌とか、非実行家肌とかいうことが決定するのではなく、私にいわせれば客観的主観的、社会的個人的の「必然」が決定するのだ。

生田花世さん。

あなたは実行は「実行家肌」のものだということをしてから、最後に「マルキシズムは政治主義であつて、政党的運動にはいつて行くから実行的だ」といつていなさるが、馬

九廿

鹿な！ 政党的運動が実行的であつたり、反政党的運動が実行的であつたりするのは、時代と環境によることだ。いずれが、そして誰にとつて実行的であるか、それはそれぞれ違つてくる。支配者にとつて「実行的」なのが、被支配者にとつても実行的であるとはいえない。例えば現在では、あなたのいう意味の「実行」はマルキシズムの中にあつては最もよく社会民主主義が「実行」する。さらにさかのぼつてブルジョア政党的(民政党的)少壮者などは、われわれの運動こそは無支配の社会へ行く過程としての最も現段階的のものであると称している)より以上実行的である。そうすると、生田さんのいわれる「実行」は「座談会」的のそれと、「ダラ幹」的のそれに帰着するということになる。

生田花世さん。

あなたのいう意味の実行などというものは、こんなにあやふやなものです。即ちあなたの目にうつる「今日の日本」では、支配者こそ、そしてそれに媚びるもの、それと妥協するもの運動こそ「実行」的のです。

お断り 筆者は他に「期間与謝野晶子」を書く予定になりましたが、頁の都合で果せませんでした。いつか果します。